

# Z4K5建築プロジェクト The Z4K5 Construction Project

工藤 卓<sup>1)</sup>  
Takashi KUDO

**Abstract:** Z4K5 is the name of a construction, the monogram from a BMW “Z4” Roadster and the initials of the client’s name. The Z4K5 was built on the ground steeply sloping down to the craggy coast. The keywords for the design concept are the genius loci, a refuge, a cave, and stairs. The Z4K5 embodies the genius loci felt by the client and the architect from the atmosphere of the site. Its main rooms are a garage for the Z4 and the client’s study. As a compact refuge made of reinforced concrete, the Z4K5 is designed to overlook the craggy coast and harmonize with the landscape.

キーワード：ゲニウス・ロキ（土地の雰囲気／精霊）、記憶、隠れ家、洞窟、階段、風景、眺望

Keywords：Genius Loci, Memory, Refuge, Cave, Stairs, Landscape, View

## 1. はじめに

BMW “Z4” は、エドワード・バングルのロードスターへの思いを造形にした20世紀デザイン史に残る名品である。このZ4のガレージを兼ねた小さな隠れ家で執筆活動をしたというのがこのプロジェクトの始まりである。

建て主が探し当てた敷地は、自然公園法で保護された小さな半島の先端部で、海岸に急降下する南面傾斜地である。海中の一部も敷地に含まれ、太古の記憶を語りかけてくるような岩石が露出して荒々しい。

敷地幅は10m～17m程と狭いが、高低差が20m程あり、隠れ家の条件を満たす十分な美的経験を得ることができる。ジェイ・アプルトンが『風景の経験』<sup>1)</sup> で指摘している〈美しい眺望をもつ風景は、心地いいだけではなく、予測できない激しさや危険性も潜んでいる〉という「眺望- 隠れ場理論」と響き合う場所である。

風景における「場所＝土地」が独自の土地柄や性格を有する空間であることは、ノルベルグ・シュルツの建築論『ゲニウス・ロキ』<sup>2)</sup> に詳しい。そこでは、〈建築家は人間と環境とのあいだに成立する基本的な関係を建築に関連づけ、有意義な「場所」を創りださなければならない〉としている。

18世紀イギリスの詩人アレキサンダー・ポープの「バーリントン卿への書簡」に見られる建築時におけるランドスケープの捉え方もゲニウス・ロキに通じて興味深い。

「すべてにおいて、その場所のゲニウス（精霊／雰囲気）に相談せよ。それは水を昇らせるべきか落とすべきかを告げてくれる。

丘が意気揚々と天高くそびえるのを助けるべきか、谷を掘って丸い劇場にするべきかを教えてくれる。土地に呼びかけ、森の中の開けた空き地を捕まえ、楽しげな木々に加わり、木陰から木陰へと移り、意図したラインを切ったり、方向を変えたりする。あなたが植えたとおりに塗り、あなたが作ったとおりにデザインしてれる。」

（松永英明訳、出典：ウィキペディア）

古来から、日本の建築時では、土地を使用させてもらうことへの感謝と、土地の神への許しを得る儀式を地鎮祭として執り行ってきた。しめ縄で囲まれたひもろぎ（神籬）の左右には、緑・黄・赤・白・青の五色絹を立てる。その五色は、それぞれ天地万物を組成している木・火・土・金・水を表している。

地鎮祭で祓い清められたこの小さな場所に、「ゲニウス・ロキ」に敬意をはらう大地と海と天空の自然感を身体化する最小限の空間の創造を試みるのが、このプロジェクトの目標である。それは機械文明が創造した美しいロードスター Z4と自然と人間の絆が再構築される隠れ家としてイメージされる。

## 2. ゲニウス・ロキからの創造

この敷地を建て主が購入するにあたっては、他の場所にはない風土的現象とは別に、ゲニウス・ロキを彷彿する「土地の精気」を感じたからだという。建築家としてそのゲニウス・ロキを共感するために、この土地に幾度も足を運んでみた。夏の日差しが強烈にまぶしい日、暗く寒い冬の、

1) 近畿大学産業理工学部建築デザイン学科 教授 kudotaku@fuk.kindai.ac.jp

潮風が激しく巻き上げる嵐の日などを体験した。眼下の海が波高く荒れた時の畏怖の感覚は忘れがたい。一方、穏やかな日に岩石に横たわる午睡は格別であった。建築を学ぶ学生たちと炎天下で草刈りをして敷地全体のボリュームを体感した。等々。とにかく、建築を考える前に、この土地を支配するゲニウス・ロキの本質を探し求めずにはいられない不思議な思いがあった。

何ヶ月もたって、この土地に建てる建築のイメージは、自らの建築体験と重なって現れてきた。この土地に立つと、前に見たことがあるような、どこかで体験した空間を思い出すのである。それは、過去に旅先で感じた美的感動をともしう建築の記憶だと気づいた。

「ゲニウス・ロキ」を思い浮かべる土地での建築行為は、建て主と建築家の協同作業の中から構想されることが望ましい。このことは、洋の東西を問わず古くから行われてきた風土的建築行為の慣習である。A.ラポポートの『住まいと文化』<sup>3)</sup>には、イスラム時代のサラエボにおける無名の工匠による住居の設計の様子が描かれている。「ある日、建て主と大工は家を建てる話をした。彼らは、地面が緩やかに傾斜している地点で足を止めた。大工は樹木、敷地、周囲、それから谷間の町をみた。……大工はどの木を犠牲にするかを聞き、杭を数フィートずらして、満ちげにうなずいた。新しい家が近所の建物からの眺めをさげざらないことを彼は確かめたのであった。このあと大工は明るさ、日当たり、水などの様子を調べて帰って行く。」

Z4K5の建て主がこの土地の「ゲニウス・ロキ」からイメージした建築的要素は、記号論学者ウンベルト・エーコの建築論「機能とサインー 建築の記号学」に見られる〈洞窟〉と〈階段〉の二つの主題だという。

### 3. 空間の記憶

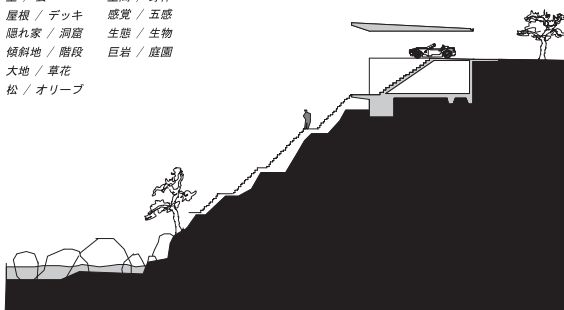
建築空間が備えている人間のための身体性は、自らが空間に浸って得た体験として蓄積されていく。Z4K5の設計行為では、新しい造形を生み出そうとすることよりも、建て主と建築家が共感する身体的記憶が示唆するかたちをイメージすることが、有効であると考えた。そこから生まれる造形は、美に対するものであり、建築的な品質や機能性の度合いではない。

最終的にイメージされた空間は、有りのままの自然と対峙する洞窟のようなものである。いわば、日本的空間の「奥性」への憧れのようなものである。この小さな土地が醸し出す雰囲気が刺激するどこかで体験した空間の記憶を、建築とランドスケープの設計に現さなければならない。

ポルテコ（柱廊）はその記憶のひとつである。イタリアの古都ボローニャの歴史的市街地は、歩道に列柱を並べ、上階の部屋を飛び出させたポルテコが連なっている。中世

Z4K5  
建築を考える出発点（場所の感覚と理解）

太陽 / 月	海 / 水
空 / 雲	空間 / 身体
屋根 / デッキ	感覚 / 五感
隠れ家 / 洞窟	生態 / 生物
傾斜地 / 階段	巨岩 / 庭園
大地 / 草花	
松 / オリーブ	



①



②

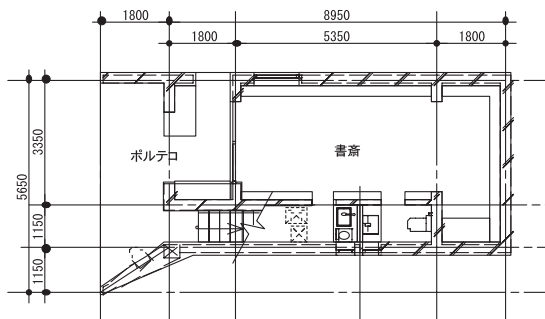


③

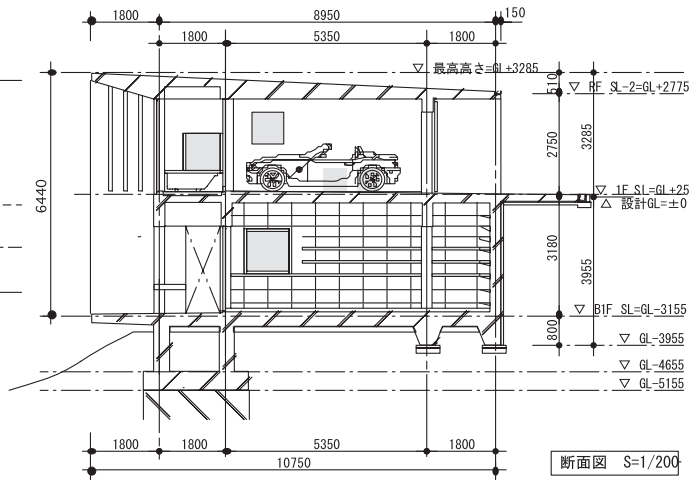


④

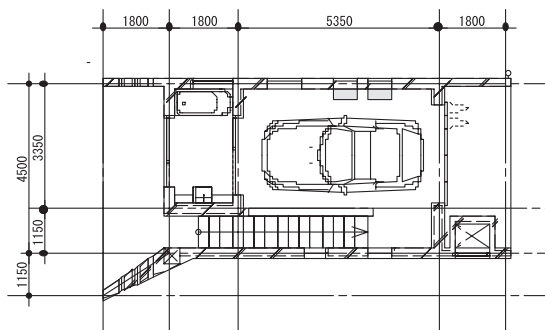
- ①「ゲニウス・ロキ」を主題にした建築プロジェクト
- ②高低差20mの敷地
- ③敷地内の巨岩と一本松
- ④記憶のオリーブ
- ⑤基本設計図



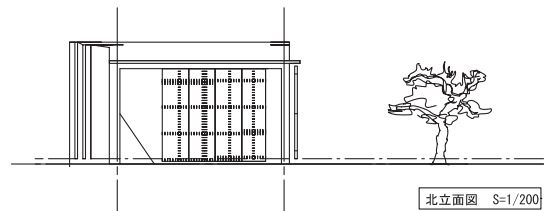
地上階平面図 S=1/200



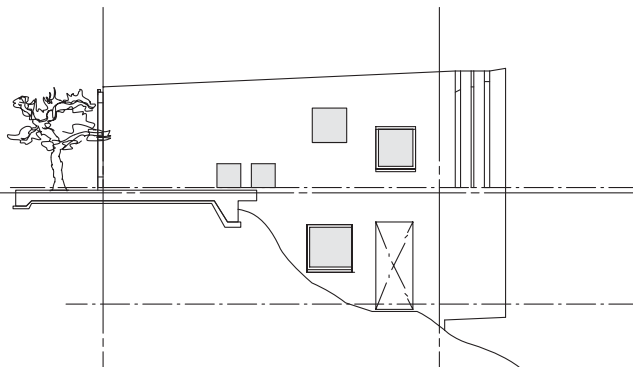
断面図 S=1/200



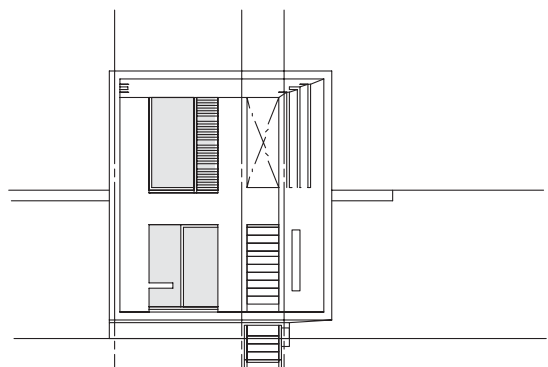
地階平面図 S=1/200



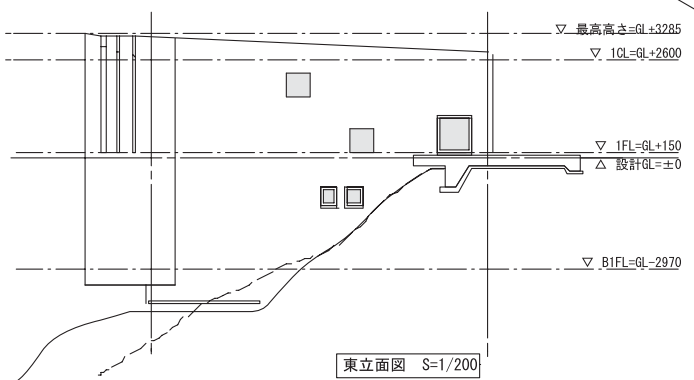
北立面図 S=1/200



東立面図 S=1/200



南立面図 S=1/200



東立面図 S=1/200

以来のヨーロッパの学芸の中心地で大学生や教授たちが行き交うポルテコは、学究の隠れ家が並ぶ前庭のような感覚で使用されている。Z4K5では、建て主と建築家のこうした共通体験の空間イメージから、Z4を収めた上階の下に、隠れ家に欠かせないポルテコの場所が創られた。

ボローニャに関連してもう一つ共通する空間イメージがある。イタリア映画の巨匠エルマンノ・オルミ監督の『CENTO CHIODI』（ポー川のひかり）である。病める現代の寓話として、ポー川流域の空間と時間の中で、過去を捨てた哲学教授がたどり着く「場所」への原点回帰を映像化している。序盤のシーンで、教授が過去との決別のために、橋の上から投げ捨てたのがBMW “M6” のキーである。Z4K5ではこの物語とは逆に、Z4を保護されるべき美術品の象徴として扱うことにした。

建て主がZ4K5に重ねる空間のイメージは、音楽にも広がっていく。ピアニスト、ファジル・サイのDVDもそのひとつで、イスタンブルのボスポラス海峡を臨む丘陵地で廃墟となった煉瓦造建築を修復したスタジオで演奏収録されている。バッハのフーガイ短調が流れるガラス張りスタジオの眼下に行き交う船の映像は、スケールこそ比較にならないが、Z4K5が立地する湾内の風景と重なる。

DVDを楽しみながら、かつてボスポラス海峡を船で渡る際に、ブルーノ・タウトが設計した別荘建築を遠目に探した記憶を思い出す。このZ4K5もまた、船上の誰かの記憶に残ることもあるのだろうか。廃墟での音楽は、隠れ家への思考回帰とどこかで通じるものがあるのかもしれない。

海峡の岸辺テラスでバッハの曲を語るファジル・サイの背景に、Z4K5のシンボルに植えたいと思っていたオリーブの木の葉が揺れていたのが印象に残っている。

### 3. 庭園

人類の最初の住まいは庭と同化していた。小野健吉の日本庭園の定義によれば、庭は、〈祭祀・儀式・饗宴・逍遥・接遇などの場として、あるいは観賞の対象として、一定の空間的・時間的美意識のもとに造形される屋外空間〉<sup>4)</sup>である。

11世紀平安末期の「作庭記」がチャールズ・W・ムーアの『庭園の詩学』<sup>5)</sup>に紹介されている。「先ず始めに、地の勢いと水の勢いを考慮する。次に昔の作品を学び、自分が知る名所の美しさを思い起こす。自ら選んだ敷地のうえに、その記憶を自由に蘇らせ、自らの心の動きを最も素直になぞらえ、自分自身の庭園にする。」

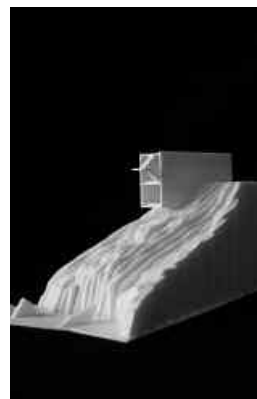
この「作庭記」は、その後の日本の庭園文化に大きく寄与していった。「作庭記」の庭園の概念は、特定の様式を指しているのではなく、優れた自然景観を模範とした「写し」の中に心を解放する空間を示唆している。



⑥



⑦



⑧

- ⑥カーサ・マラバルテのように
- ⑦スタディ模型〔建築・階段・庭園〕
- ⑧初期イメージ模型〔建築・眺望〕
- ⑨南壁面のコンクリート工事
- ⑩コンクリート打設工事
- ⑪埋め込まれる鉄筋工事
- ⑫舳先のように
- ⑬ワーズワースに捧ぐ
- ⑭階段が駆け上がりZ4K5を突き抜けていく
- ⑮階段には踊り場が必要である





⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮

日本の庭園は、小さな面積の中に宇宙を読み込もうとしてきた。この点で、Z4K5の敷地自体が、すでに自然景観の要素が凝縮されている。敷地境界が目に見えるもので囲い込まれていなくても、一定の空間を占有した心理的な美意識を感じとることができる。

この原始の庭園に、あえて人工的な植栽を強いるならば、イタリア歴史都市近郊の田園風景の象徴となっている「オリーブの木」を植えたい。オリーブの木は地中海地方が原産だが、Z4K5の土地の環境条件でも育ててみたい誘惑に駆られる。海運で栄えたアマルフィなどの歴史都市が、海辺の崖地に洞窟性の高い建物を建て並べ、オリーブやレモンの木を植えた果樹園を楽しんできた風景に思いを寄せたい。

敷地の波打ち際に不思議と一本だけ松の木がある。それが、映画『サクリファイス』の一本の細い松の木の映像と重なって仕方がない。アンドレイ・タルコフスキー監督が北欧の島を舞台に、核戦争で破滅した世界の救済を描いた作品の一本の松である。

実際に、この残された松の木が、巨石たちとなにやらつぶやきあっている情景を想像してみるようになったのも不思議だ。庭園は観賞の対象であるだけでなく、創造への祈りの場でもあるからかもしれない。

こうして、波間に見え隠れする岩石を石組みに見立て、海と対岸の山並みを借景にした敷地そのものが庭園となる。

#### 4. 階段

Z4K5の高低差20mの階段は、海辺で風化された岩石の頂部にうがたれたえくぼのような窪みを起点としている。起点となった岩のえくぼは、この土地の「ゲニウス・ロキ」が、海と陸を繋ぐ階段の軸を位置づける印のようである。この場所以外に階段を造れる位置があり得ないことをその形で示している。えくぼが何故そこにあるのかは知らない。自然の刻みか、古代の人工的な祈りの対象かは分からない。階段の上部から俯瞰するえくぼの存在は、庭園を秩序づける一筋の軸線の焦点に見えてくる。

階段は、庭園を上り建物を突き抜け、Z4が格納される地上階のガレージまで延長されている。設計行為の気持ちの上では、ガレージの屋上を超えて空までつながっている。

庭園に描かれた直線階段は、自然の優しさと危険性に対峙する意思の現れである。階段の踊り場は、岩石群とオリーブ庭園へのアプローチでもあり、真の南北軸上での午睡の場でもある。

カーサ・マラパルテ(1937頃)はZ4K5の階段と屋上のモデルとしてイメージされた。設計を学びはじめた頃に観たジャン・リュック・ゴダール監督が描いた「軽蔑」(1963)の撮影舞台がこの建築であった。紺碧のカプリ海に突き出た断崖に立つイタリアンレッドに塗られた建築は、ムッソ



⑩



⑪

⑫航路と建築

⑬何もない地上のテラス

⑭引き潮の庭園

⑮夜景／土地への祈り



18

21



19



リーニによって流刑に処せられたイタリアの作家マラパルテの別荘建築である。建築家アダルベルト・リベラの監修や地元の石工の助けを借りて、マラパルテ自らが設計しながら建設したと伝えられる。

古代のローマやポンペイで実用された屋上（ソラリウム）に向かって幅を拓げていく大階段の美的衝撃は大きかった。

完成したZ4K5からはカーサ・マラパルテのイメージは消え去っているが、船の甲板のようにフラットにした屋上造形に、かすかにそのノスタルジーを残したつもりである。

## 5. 家具

Z4K5は、記憶された空間の断片によって形づくられている。その記憶の多くは個人的な経験と知識によるものである。同じことを家具の選定でも心がけた。インテリアデザインではなく、家具そのものの記憶を組み合わせようとした。デザイン性に優れた家具は、機能性だけでなく、その誕生の物語を芸術的価値として付加している。

Z4K5は隠れ家書斎である。創造のための知識と記憶の集積場となる。そのために土を掘って洞窟化した地階の三方の壁面は書籍で満たされる。この様相は、グンナール・アスプルンドやアルヴァ・アアルトなど、北欧の近代建築家が設計した図書館や別荘の書籍棚を思い起こす。かつてこれら図書館の書籍に包み込まれた身体的空間性を、この隠れ家に表現しようとした。隠れ家の書籍は空間の主座に展示されなければならない。

洞窟をイメージした隠れ家には、寝室用のベッドはふさわしくない。Z4K5では、書籍に埋もれて仮眠できるディベッドソファしか思い浮かばない。おそらくル・コルビュジェのLC5（1934）も同様の発想からデザインされたものであろう。ディベッドの歴史は、古代ギリシャやローマの別荘建築まで遡る。当時のディベッドはキャスターが付いて回廊式庭園の日陰に移動できる軽やかなものであった。

執筆デスクもコルビュジェがデザインした分厚い透明ガラストップのLC6テーブル（1928）を選んだ。

LC5のサイドテーブルには、アイリーン・グレイがデザインした円形ガラストップのE.1027（1929年）を組み合わせた。このテーブルはアイリーン・グレイが「海辺の家E.1027」用にデザインしている。この白く横長のモダンなボックス型建築は、近代建築の特徴を現す開放された明るさと伸びやかさに満ちている。そして海岸に通じる階段も白く一直線だ。

「E.1027」にはアイリーンとジャン・バドヴィッチのイニシャルが隠されている。これに倣った「Z4K5」は、Z4と建て主のイニシャルをモノグラムにしたこの隠れ家の記号である。

LC6、LC5、E1027は、近代建築とともにデザインされた



⑩



⑪



⑫

⑩空の存在を意識する

⑪屋上の日光浴

⑫つなぐ階段

⑬階段を上るK5





時代の申し子たちである。これら家具の物語のすべてが、  
今後はZ4K5でも語られていく。

Z4の話し相手は、パントンチェア(1967)である。FRPという新素材で世界初の射出成形チェアとして知られる。この椅子のオリジナルは、リートフェルトがデザインしたZ形のジグザグチェアである。ヴェルナー・パントンは、Z4のボディに刻まれたZラインと同じZのシェイプを夢見て、20世紀中葉にこの名作を実現した。

## 6. ディテール

Z4K5のディテールは、この土地の「ゲニウス・ロキ」を体現する〈光〉を造形化しよう心がけた。

建物の先端部は、分厚いコンクリートが角度を開き、吹抜の天井はそり上がっている。実際にこのポルティコに身を置くと、光と影が交差する中ですべての音が響き合い、古いSP盤レコードを聴いているような臨場感がある。

Z4K5両端部の3本のスリットは、空の存在を意識するための装飾彫刻である。過剰なメッセージを刻むことは避け北欧の記憶と繋げることにした。

北欧の夏の旅では、雲のかたちが見えない。どこまでも青く澄んだ広がりだけで、空の存在が希薄な印象がある。しかし、建築先端のシルエットに空の存在を見ることができる。北欧の建築家たちは建築の先端に空と対話する美の仕掛けを創っていたのだ。記憶に鮮明なのは、ノルウェーのフィヨルド岸集落の古い木造教会の屋根を飾る幾本ものドラゴンのシルエットである。谷底をうごめくゲニウス・ロキから、空に向かって吠える異形である。

Z4K5地階の東の高窓からは、朝日が地上すれすれから差し込む。西の天井隅のトップライトからは上階の窓を経由した午後の光が届く。土中に埋められた地階の暗さのなかから天空の光をとらえることは、多くの身体的建築経験と重なっていく。

窓の輪郭は眺望のために造られる。上階にはZ4が眺めるピクチャーウインドーを、地階にはK5が自然の移り行きを眺望する窓を造っている。

## 7. おわりに

地に沈めた洞窟状の小さな隠れ家を造ることを目的に、建て主と建築家の空間記憶の断片を刻み込む設計ができた。おそらく、多くのアノニマスな建築もまたこのようにして造られ続けているのであろう。近代文明の先端で暮らしていても、土地や場所のゲニウス・ロキに思いをはせる建築の設計手法はいまだ有効に働くことを感じた。とりわけ、自然の脅威を潜ませた土地では、敬意と祈りを表明する建築と庭の原初が重視されなければならない。

建築家ルイス・カーンの〈建築は、何であることを欲して



㉔



㉕

- ㉔ ガレージの光
- ㉕ Z4の隠れ家
- ㉖ 陽だまりのポルティコ
- ㉗ 隠れ家前のポルティコ
- ㉘ ガレージの午後
- ㉙ 主室の光と本棚
- ㉚ 朝日の窓
- ㉛ 夕日の窓
- ㉜ あかりの景



26



29



27



30



31



28



32

いるか」との問いを思い浮かべれば、この発見された土地の使用を許されるのは、この土地に隠されている美的秩序を発見できたときである。目に見えるようになった秩序が行き渡り、これまで大切にしてきた建築の記憶がZ4とK5に届くことを願う。

### 謝辞：

Z4K5のような厳しい敷地条件の建築行為は、建築計画と構造計画の協同が大切である。

実施設計の図面作成を担当してくれたAL architects代表の佐野正樹氏には、コスト削減に奮闘し、建築確認申請の対応と設計監理に尽力いただいた。

九州C&C事務所代表の高平光和氏には、この土地と建築の構造的な関わり方を解いていただいた。同時にローコストのコンクリート工法や、設計監理でも指導をいただいた。

建築設計には模型によるスタディが必須である。研究室の学生たちには、設計のアイデアを根気よく模型にいただいた。実測調査や階段の塗装にも奮闘いただいた。

工事施工は、研究室出身の内山琢也氏にお願いした。予算的にも工法的にも困難な工事を竣工していただいた。

みなさんの協力がなければ、足かけ4年の時間をかけたこのプロジェクトの完成はなかったと思う。重ねて、設計研究を支えていただいたみなさまのご助力に感謝する。

### 参考文献：

- 1) ジェイ・アプルトン、風景の経験、菅野弘久訳、法政大学出版局、2005
- 2) クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ、ゲニウス・ロキー建築の現象学をめざして、加藤邦男・田崎祐生訳、住まいの図書館出版局、1994
- 3) A.ラポポート、住まいと文化、山本正三他訳、大明堂、1987
- 4) 小野健吉、日本庭園- 空間の美の歴史、岩波新書、2009
- 5) チャールズ・W・ムーア他、庭園の詩学、有岡孝訳、鹿島出版会、1995



③



④

③ 建築と庭園の秩序

④ 岩に刻まれたえくぼ・階段のはじまり